

絵本の捉え方と表現に関する研究 —レオ・レオニ『ペツェッティーノ』の絵本について—

富永 剛^{*1}・堤 彩^{*2}

^{*1}九州女子短期大学 子ども健康学科

^{*2}九州女子短期大学 専攻科子ども健康学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

要 旨

本研究では、絵本・『ペツェッティーノ』と青年期の学生を「自己理解」という共通の観点で捉え、学生の自己理解が絵本・『ペツェッティーノ』を読む上でどのように影響するのかということに着目した。

その結果、主人公・ペツェッティーノの気持ちに理解を示した学生は88.4%であった。印象的な場面については、ペツェッティーノの自己理解に変化が表れる場面に注目している学生が多く、より具体的に学生がペツェッティーノの気持ちを読み取っていることが窺えた。

学生の自己理解と関連させた調査では、主人公・ペツェッティーノの気持ちの理解については、自己理解の低群と高群を比較すると、低群は「1.とても理解できる」「2.まあまあ理解できる」と回答している学生は86.7%であるのに対して、高群は75.0%であった。そのうち、「1.とても理解できる」と回答した者は、低群では20.0%であるのに対して、高群では5.0%と低い。また、印象的な場面については、自己理解の高群より低群の方が、ペツェッティーノの自己理解が変化する場面に注目している。このように、学生個人の自己理解の度合いが、絵本・『ペツェッティーノ』を読む上で大きく影響していることがわかった。

本研究での結果から、一冊の絵本での調査ではあるが、青年期にあたる学生が絵本をどのように読み、絵本にどのような意味を感じているのか知ることができた。このことは、大人が絵本をどのように読むのかということの手がかりになったのではないかと考える。

1. 緒言

吉田は絵本ブームを支えているものの一つとして、「複雑なストレス社会の中で人間としての原点を絵本に見いだす大人」や「大人も虜にする質の高い絵本が増加したこと」¹⁾を挙げている。大人が絵本ブームに影響を与えていることは非常に興味深い。

では実際に、大人は絵本をどのように読むのだろうか。また、大人は絵本を読むことにどのような意味を感じるのだろうか。これらを明らかにすることは、絵本を広義なものとして捉え、絵本の多様な価値を知る一つの手段になると考える。

そこで本研究では、レオ・レオニの一つの絵本を用いて調査を行った。レオ・レオニは、1910年にオランダで生まれ、アメリカやイタリアで絵本作家、イラストレーター、グラフィックデザイナーとして活躍した。レオ・レオニの絵本は、小学校の教科書にも取り上げられている『スイミー』をはじめとして、その多くが日本語訳で出版されている²⁾。

本研究ではレオ・レオニの絵本・『ペツェッティーノ』³⁾を用いて、青年期の大学生に調査を行った。絵本・『ペツェッティーノ』のストーリーを「自己理解」という観点で捉えた場合、「自分とは何か」という疑問に直面する青年期の学生を対象にし、学生の自己理解の高低を明らかにしながら調査することが、絵本の価値を考える上で意義のあることだと考えた。

また、ピーターは、青春期を「子どもと大人が実際に共有する年月、すなわち、一個人のなかに子どもと大人が同居し、活発に活動している時期」⁴⁾と述べている。そのため、青年期の学生が絵本をどのように読むのか知ることは、大人が絵本をどのように読むのかを明らかにするための一つの手がかりとなるのではないかと思われる。

この二つの点を踏まえて、青年期の学生に調査を行うことが最適であると考えた。

II. 目的

本研究では、大人が絵本をどのように読み、絵本を読むことにどのような意味を感じるのか明らかにするための一つの手がかりとして、青年期の大学生に調査を行う。また、絵本・『ペツェッティーノ』と青年期の学生を「自己理解」という共通の観点で捉え、この絵本を読む上で学生の自己理解の違いがどのように影響するのか明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 絵本・『ペツェッティーノ』についての文献研究

まず、本研究で用いる絵本・『ペツェッティーノ』について関連する文献研究を行った。

(1) レオ・レオニの絵本の特徴

ピーターは「大多数の子どもの文学は、大人が子どもとは異なる読み方で読んで独特の価値を見出せるものである」⁵⁾と述べている。では、大人は絵本をどのように読み、絵本にどのような価値を見出すのだろうか。それらの手がかりを掴むため、本研究で取り扱う絵本・『ペツェッティーノ』の原作者であるレオ・レオニの絵本の特徴を考えていきたい。

鳥越は、レオ・レオニの絵本を「彼の哲学や政治的な興味から教訓臭も感じ、その根底にある問題の、深い意味までは、幼い子どもには理解できないのではないか」⁶⁾と述べている。つまり、レオ・レオニの絵本を読むことで、幼い子どもには理解できないが、大人はレオ・レオニが絵本に込めた何らかのメッセージを読み取ることができるのではないかと考える。

また、産業カウンセラーの吉岡は、中高年男性向けのセミナーで、レオ・レオニ作「ひと

あしひとあし」を読み聞かせた。

厳しい社会に属している中高年男性は、仕事においてなんらかの危機に直面した時、その問題を解決しようと、一人で悩み苦しんでいた。無意識のうちに、「家族を支えなければいけない」という思いが、仕事から逃れられない状況を引き起こしていた。しかし、この絵本・『ひとあしひとあし』の主人公・あおむしが、切羽詰まった状況の中、取った行動は「逃げる」ことであった。⁷⁾

中高年男性は「逃げる」という選択肢があることを、この絵本から知ることができた。しかし、この場合、聞き手である中高年男性が、絵本から「新しい気づき」を得ることができたのは、読み手である吉岡が聞き手の状況を把握したうえで、伝えたいメッセージを兼ね備えた絵本を選択したからであると考えられる。これは一つの事例ではあるが、レオ・レオニが絵本に込めた多くのメッセージの中の一つを、大人が理解することができたと考えられるのではないか。

これらのことから、大人がレオ・レオニの絵本を読むことで、絵本の新たな価値を見出せるのではないと思われる。

(2) 絵本『ペツェッティーノ』について

ここで、絵本・『ペツェッティーノ』のストーリーを示す。

主人公・ペツェッティーノは小さなオレンジ色のかけらである。ペツェッティーノは、自分が小さく、きっと誰かの部分品にちがいないと考える。そこで彼は旅に出て、「わたしは あなたの ぶぶんひんでは ありませんか？」と仲間に尋ねるが答えは見つからない。ペツェッティーノは、こなごなじまへ行き、自分はかけがえのない存在なのだとことを実感する。島から帰ってきたペツェッティーノは「ぼくは ぼくなんだ！」と叫び、仲間は彼を温かく迎える。⁸⁾

以上が絵本のストーリーである。ストーリーの最初の場面で、「ほかの みんなは おおきくて おもいきった ことも すばらしい ことも いろいろ できた」とある。この文章から、ペツェッティーノが自分と「ほかの みんな」を比較して自分を捉えていることが読み取れる。その直後の文章、「きっと だれかの とるに たりない ぶぶんひんなんだと おもって いた」にある「とるにたりない」「ぶぶんひん」などの言葉から、ペツェッティーノが自分の存在に対して肯定的な印象を抱いておらず、自分の価値を低く捉えているように思われる。「だれの ぶぶんひんなんだろう」という疑問を持って、ペツェッティーノは自分を探す旅に出る。しかし、自分探しの旅を終えたペツェッティーノは、「ぼくは ぼくなんだ！」という答えを見つけて仲間たちの元に帰ってくる。つまり、物語の最後はペツェッティーノ自身、自分を肯定的に捉えていると思われる。このようなペツェッティーノの心境の変化は、自分探しの旅の中でのどのような場面が関連していると考えられるだろうか。それは、ペツェッティーノが「こなごなじま」で経験したことが大きく関連している。こなごなじまへ行ったペツェッティーノは、「けつまずき ころがりおち」てしまう。そして、こなごなになる。ペツェッティーノは、この「こなごなになる」という経験から、「じぶん

も みんなと おなじように」部分品が集まってできているということを実感することになる。自分が誰かの一部ではないと自覚し、ペツェッティーノはストーリーの最後、「ぼくは ぼくなんだ!」と思うことができたと考えられる。絵本・『ペツェッティーノ』のサブタイトルとして「じぶんを みつけた ぶぶんひん のはなし」とある。レオ・レオニはこの絵本から、誰の一部でもない、ありのままの自分であることの大切さを、一つのメッセージとして伝えたかったのではないかと思われる。

次に、この絵本の絵について考えていきたい。ペツェッティーノは小さいオレンジ色の四角で表されているのに対して、仲間たちはペツェッティーノの何倍も大きく、多色で、カラフルに表現されている。本田が、ペツェッティーノの仲間たちの姿を「視覚的に主人公・ペツェッティーノはどこに当てはまるのであろうかということを想像させる」⁹⁾と述べているように、「自分は何でできているか」という設定には、レオ・レオニの小さいものを集めて大きなものを作るというモザイク研究の成果とデザイン観が現れており¹⁰⁾、自分は誰かの部分品だと思っているペツェッティーノの気持ちの方が分かりやすく表現されている。また、ペツェッティーノが「こなごなになる」以外で終始、色や形、大きさも変わらないことが、ありのままでいて、かけがえのない存在であることを示しているように思われる。そして、ペツェッティーノやその仲間たちは、人間のような目や鼻もなければ、手や足さえも、どの位置なのかわからないような、不思議な形をしている。学生がこのような絵を、どのように感じるのか興味深い。

(3) 青年期における自己理解

ここまで絵本・『ペツェッティーノ』について述べてきた。周りの友達が大きくて何かしらできることがあったことに対し、ペツェッティーノは、皆と比べて小さすぎたことで、自分は誰かの「ぶぶんひん」であるとしか思えなかったと考えられる。このように自分と他人を比較して、「自分とは何なのか」ということを明らかにしたかったペツェッティーノの気持ちは、個人差はあるだろうが、人が成長する過程で、誰もが少なからず経験するのではないか。本研究を行うに当たって、自分を理解するために自分探しに行くペツェッティーノの気持ちを、より理解しやすいのはどの時期であろうかという考えに至った。それは、「自分とは何なのか」ということについて考え、時に悩み、葛藤する時期である青年期にあたる者ではないか、自己理解について直面する時期である者こそ、絵本『ペツェッティーノ』のストーリーを深く読み取ることができるのではないか。

ここで、調査対象である青年期の特徴を詳しく見ていきたい。太田・石野は「『自分とは何か』『自分は何のために生きているのか』『自分は何になりたいのか』といったことを考え、アイデンティティを形成してゆく時期である。」¹¹⁾と述べている。また、青木は「青年期は自我意識が芽生え、自己存在が問われるようになる。言い換えれば自己に目を向け、自己の存在を確立すべく模索し始める時期である」¹²⁾と述べている。実際に、青年の自己の形成

や就労の問題に関わって、自分探しがひとつのキーワードになっている¹³⁾。その自分探しの中、自己理解を深めていく過程で、時には悩み、葛藤したりすることがあると思われる。

本田は、絵本・『ペツェッティーノ』を青年期の学生に読み聞かせ、学生の自己認識がどのように現れるかを調査した¹⁴⁾。その結果、主人公・ペツェッティーノの気持ちを理解できることを示した学生は、全体の89.5%であった。このことから、ほとんどの学生が、絵本・『ペツェッティーノ』に共感的な姿勢であることが窺える。それは、学生が「自分とは何なのか」を理解しようと悩んだり、考えたりする青年期であるために、主人公・ペツェッティーノの気持ちをより現実的な視点から捉えることができたからだと思われる。

しかし、青年期のそのような自分への問いに対する悩み、苦しみの程度や時期は、個々人により微妙に違ってくるのではないか。そのような対象者一人一人の現状を把握した上で調査すると、また新たな発見があるのではないかと考えた。対象者である学生が、自分をどれほど理解しているかということに焦点を当てることは、主人公・ペツェッティーノの気持ちを、学生がどのように捉えるのかを調査する上で、意義のあることだと考える。

自己理解とは、「他者との関係で、今、自分の内面に生起している感情をありのままに意識し、さらに、自分の性格傾向や考え方について知り、自分に対する理解を深める」¹⁵⁾であるのに対して、自己認識とは「自己をはっきり知り、その意義を正しく理解すること」である¹⁶⁾。この二つの言葉の意味は、どちらも「自分を理解する」という点で同じであり、本田の研究¹⁷⁾では、自己認識として表現されているところを、本研究では学生個々人の自己理解がどの程度であるかを意識した調査をするため、自己理解度として考えていく。

自己理解度の高低を明らかにした上で、青年期における学生が、絵本・『ペツェッティーノ』をどのように捉えるのかを調査した。

2. 調査実施日

2015年7月13日

3. 調査対象

K短期大学 幼稚園教諭免許取得希望者及び保育士資格取得希望者106名

4. 調査方法

日本語訳『ペツェッティーノ』の読み聞かせを行い、その後、自己理解度についての質問紙と自由記述を含む『ペツェッティーノ』に関する質問紙により調査を行った。

5. 質問紙の構成

絵本・『ペツェッティーノ』に関する項目：本田の研究¹⁸⁾を参考にアンケートを作成した。

絵本『ペツェッティーノ』についてのアンケートの項目

質問. 1 主人公・ペツェッティーノの気持ちを理解できますか？

(1. とても理解できる 2. まあまあ理解できる 3. あまり理解できない 4. 理解できない)

質問. 2 この中から一番印象に残った場面を選んで、一つだけ記号に○をつけてください

1. 物語の最初に、「ぼくは、あなたのぶぶんひんではありませんか」とみんなに尋ねるところ
2. 船に乗って、こなごな島に向かうところ
3. こなごな島でこなごなになって、自分も部分品があつまってできていると気がつくところ
4. 急いでボートに乗って帰るところ
5. 最後に「ぼくはぼくなんだ！」と気づくところ
6. 最後に仲間たちに迎えられるところ
7. その他 ()

質問. 3 大人が絵本を読むことに意味があると思いますか？どちらかに○をつけてください

はい・いいえ その理由 ()

質問. 4 絵本「ペツェッティーノ」から、感じたこと・考えたことを教えてください
()

自己理解に関する質問項目：太田・石野¹⁹⁾の自己理解に関する6項目を使用した。

自己理解についてのアンケート

・1～6のあてはまる記号(A～F)に一つだけ○をつけてください

1. 自分がどんな人であるかを知っている
2. 自分の長所、または良いところがあるかないかについて知っている
3. 自分の短所、または悪いところがあるかないかについて知っている
4. 5年前の自分に比べて現在の自分は変化している、あるいは同じであるかについて知っている
5. 現在の自分に比べて5年後の自分は変化している、あるいは同じであるかについて思い描くことができる
6. 自分がどんな人になりたいかをはっきりと思い描いている

6項目すべて(A:非常によくあてはまる、B:あてはまる、C:どちらかと言えばあてはまる
D:どちらかと言えばあてはまらない、E:あてはまらない、F:まったくあてはまらない)から一つ選ぶ。

6. 倫理的配慮

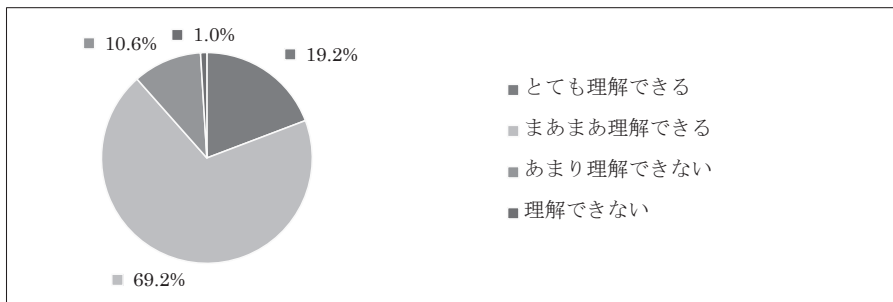
本質問紙調査は、無記名とし調査結果に関しては厳重に保管すること、研究以外の目的には使用しないことを記載し実施した。

IV. 結果と考察

1. 主人公・ペツェッティーノの気持ちへの理解について

主人公・ペツェッティーノの気持ちが理解できるかという質問に対して、「1. とても理解できる」「2. まあまあ理解できる」と回答した者を合わせると、対象者の88.4%が理解できると答えている。(表1) これは、本田の研究²⁰⁾と同様、高い割合であり、ほとんどの学生が、ペツェッティーノの気持ちを理解していることを再確認できた。

表1 主人公・ペツェッティーノについての理解 n=104



2. 絵本・『ペツェッティーノ』での印象的な場面について

対象者に、絵本・『ペツェッティーノ』で、一番印象的な場面について、選択式で回答を求めた。結果は以下の表である。(表2)

最も多い回答が、「5. 最後に“ぼくはぼくなんだ!”と気づくところ」で37.5%、次に「3. こなごな島でこなごなになって、自分も部分品があつまってできていると気がつくところ」の30.8%であった。項目5の「ぼくはぼくなんだ!」という言葉は、ペツェッティーノが自分探しの旅を終え、最終的に見つけ出した答えである。この答えはペツェッティーノが「おおよこびで さけんだ」言葉であり、ストーリーの中で唯一ペツェッティーノの気持ちが文として表現されている重要な場面である。項目3は、自分を見つけるきっかけとなった出来事であり、ペツェッティーノが自分は誰の一部でもない、かけがえのない存在だということに気づく場面である。

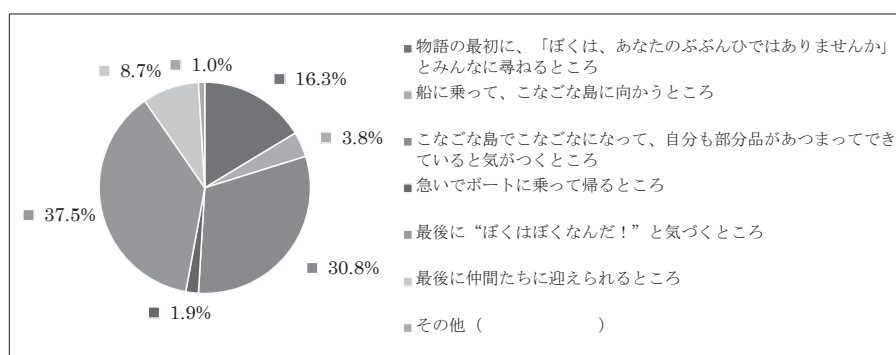
この2項目を合わせると半数以上の割合を占める。どちらもストーリーの後半であり、ペツェッティーノの自己理解に変化が表れる場面である。このように、単調な自分探しの旅に終止符が打たれ、ペツェッティーノの気持ちが顕著に変化していく過程が、学生にとって印象的だったのではないかと考える。ストーリーのはじめに、ペツェッティーノが抱いていた自分に対する疑問が消え、はっきりとした「自己理解」が成されたことで、強く印象に残ったのではないかと考える。また、絵を中心として考えると、ペツェッティーノが、項目5の「ぼくはぼくなんだ!」と言う場面は最後のページであり、登場した全ての仲間たちは、「ひとりのこらず」ペツェッティーノを待っている。仲間たちに囲まれた温かい雰囲気が、よりペツェッティーノの嬉しい気持ちを強調しているように思われる。項目3のペツェッティーノが「こなごなになる」場面は、画面の右端の下方でオレンジ色の小さなペツェッティーノが、さらに小さく割れ、砕けている様子が描かれている。この場面はストーリーの中で唯一、ペツェッティーノの形が変化する場面である。学生は文と絵の両面から受けるメッセージを受け取り、印象に残った場面を選択したのではないかと考える。

次に「1. 物語の最初に、『ぼくは、あなたのぶぶんひんではありませんか』とみんなに

尋ねるところ」が16.3%を占めた。絵本・『ペツェッティーノ』は30ページあり、その中の12ページという割合で、ペツェッティーノが仲間たちに項目1の質問を繰り返している。内容の同じ質問でありながら、「ぼくは きみの ぶぶんひんじゃ ないでしょうか?」「ぼくは きみの ぶぶんひんかな?」「ぼくは あなたの ぶぶんひん かしら?」のように、主語や語尾に若干違いがある。また、ペツェッティーノの質問に返答する仲間たちも、「ぶぶんひんが たりなくて はしれる はず ないだろう?」「ぶぶんひんが たりなくて やまに のぼれると おもうのかい?」等と返答するが、これらの返答もペツェッティーノの質問と同様に微妙な語尾の違いがみられる。この微妙な言語表現の違いが、ペツェッティーノの繰り返される単調な旅に変化をもたらし、長く自分探しの旅が続いているように感じさせて、学生にとって印象深く思えたのではないか。

それに加え、項目1ではそれぞれ違った形や特徴を持った仲間たちが登場する。この仲間たちは「はしるやつ」や「やまの うえの やつ」等という簡単な言葉で表現されており、モザイクアートのような抽象的な絵で描かれている。カラフルな色彩で描かれた新しく登場する仲間たちが、視覚的に学生の心に残る場面であったのかもしれない。

表2 一番印象に残った場面について n=104



3. 絵本・『ペツェッティーノ』についての感想

アンケートの最後に、絵本・『ペツェッティーノ』の感想を求めた。本田の研究²¹⁾を参考にして、K J法による分析を行い、内容を次のように分類した。

1. 主人公・ペツェッティーノの内面についての記述
2. 自分自身の生き方や自己の捉え方について
3. 絵の表現について
4. 子どもを視点に置いた記述
5. 難しい

結果は以下の通りである。(表3) 尚、分類した複数の項目を含んだ感想があったので、

延べ人数109人となった。

「2. 自分自身の生き方や自己の捉え方について」が、41.3%で高い割合を占めた。この項目を回答した何人かの学生の感想文を紹介したい。

Aさん

時々、自分が誰であり何のために生きているのか解らなくなることがある。そのような時に、自分という自我をしっかり持って、原点に戻るようにすべきだと感じた。

Bさん

みんな、時々『自分は何なのか』という疑問から、悩む時期があると思う。しかし、この絵本を読むことによって、自分の存在について確かめることができる。

このような感想文からは、主人公・ペツェッティーノの自分探しの旅を、自分自身の経験や考えと結びつけて捉えていることがわかる。学生自身、自分の存在に対して疑問を抱える時期であるため、自分の存在を確かめようとするペツェッティーノの気持ちを、理解できたのではないと思われる。つまり、ペツェッティーノが自分を見つけるまで続く自分探しの旅は、学生が「自分とは何なのか」という疑問を抱えた時に、考えたり悩んだりする時間と似ているのではないか。そのため、ペツェッティーノが自分探しの旅で見つけた、「ぼくはぼくなんだ！」という答えは、学生にとって「自分はありのままで良いのだ」ということを確認することができる機会になったのではないと思われる。時々わからなくなってしまう自分の存在や価値を、ペツェッティーノを通して、感じることはできなかったのではないか。このように、絵本・『ペツェッティーノ』の短い文章から、ペツェッティーノの心情を想像するに留まらず、さらに自分に焦点を当てたストーリーの捉え方をしている学生が多くいることがわかった。このことから、学生が絵本を読むことで自分自身について考える時間を持つことができたと言えるのではないか。

次に「1. 主人公・ペツェッティーノの内面についての記述」が35.8%を占めた。感想文の内容としていくつか紹介したい。

Aさん

ペツェッティーノがこなごなになって、自分が多くの部分品から作られていることを知り、『ぼくはぼくなんだ』と気づき、仲間から温かく迎えられたペツェッティーノは、自分を見つける良い旅ができたと思った。

Bさん

ペツェッティーノは自分を誰かの部分品だと思い込み、旅を続けた。しかし最後には、自分も沢山の部分品が集まってできていることに気づくことができ、この長い旅にも意味があったと思った。

ペツェッティーノの内面について記述している者の殆んどが、ペツェッティーノが「自分は誰の一部でもなく、自分は自分であることに気づいた」ことを示す内容であった。学生にとって、このペツェッティーノの気づきが、特に印象的だったと思われる。

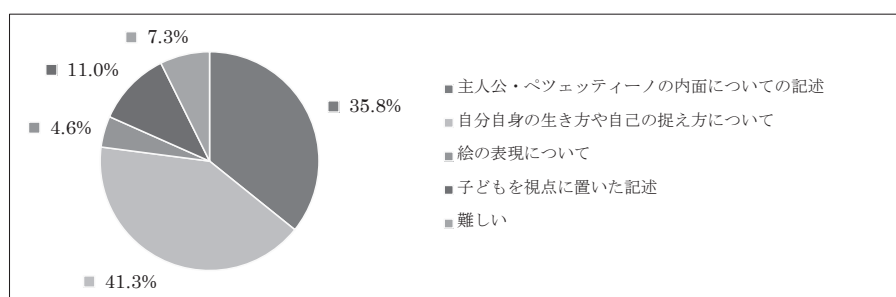
1と2の項目を合わせると、延べ人数ではあるが、77.1%で全体の7割以上となった。このことから、多くの学生が主人公・ペツェッティーノの内面を深く読み取っていることがわかる。

また、「子どもが読むには少し難しいが、自分には響く内容だった」、「この絵本を小学生に読み聞かせたい」などの回答が得られ、ここでも、対象者である学生の特徴が見え、子どもを視点に入れた考え方をしていることが窺えた。

本研究では、子どもを対象としておらず、絵本・『ペツェッティーノ』のストーリーが、子どもにとって難しい内容なのかということは把握できなかった。その他、「難しい内容だった」という回答も少数ではあるが見られた。これは、ペツェッティーノのような自分に対する疑問を理解できなかったことも考えられる。しかし、絵本・『ペツェッティーノ』に登場する、顔もなく奇妙な形をしたカラフルな生き物達が人間とはかけ離れていて、それらを擬人化して想像することが難しかったのではないかと考えられる。

他にも、対象者である学生は保育者希望の学生であり、レオ・レオニの絵本を知っている学生も多く、絵本・『ペツェッティーノ』を読み聞かせる前から好意的な態度で臨んだ者もいたのではないと思われる。絵本と関わりの少ない学生に調査を行っても、同じ結果が得られるのかということについては、まだ研究を続ける余地がある。

表3 感想文による項目分析 (延べ人数) n=109



ここで、絵本・『ペツェッティーノ』についての各質問と、学生の自己理解度の関連を見ていきたい。自己理解については、太田・石野の研究²²⁾で用いられているアンケートを使

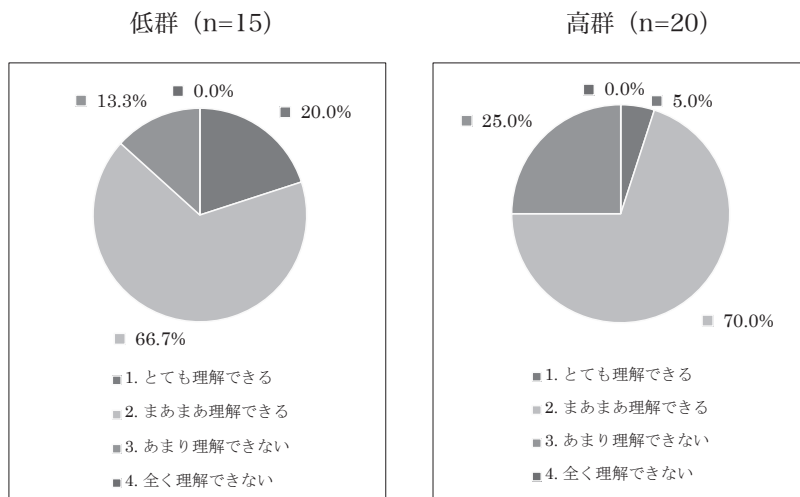
用し、点数が高いほど自己理解をしていることになるように合計得点を算出して、自己理解得点とした。そして、対象者全体の平均値25.5点 ($SD \pm 4.3$) より算出し、30点以上を高群とし、21点以下を低群とした。その後、絵本・『ペツェッティーノ』についての質問項目とクロス集計を行った。それぞれの構成比は以下のようなものである。(表4, 5, 6)

4. 学生の自己理解と主人公・ペツェッティーノの気持ちの理解(質問. 1)との関連について

自己理解の低群と高群を比較すると、低群は「1. とても理解できる」「2. まあまあ理解できる」と回答している学生は86.7%であるのに対して、高群は75.0%であった。また、「1. とても理解できる」と回答した者では、低群では20.0%であるのに対して、高群では5.0%と低い結果であった。(表4)

このことから、自己理解度の低い者の方が、ペツェッティーノの気持ちにより理解を示していることがわかる。これは、ストーリーの最初に、自分は誰かの部分品であると思っていたペツェッティーノの気持ちが、ストーリーの最後に大きく変化することが、自己理解の低い者にとって印象的であったのではないかと考える。つまり、自己理解の低い者は、主人公・ペツェッティーノの最初の「自分は誰かの部分品なのではないか」というような自分の存在や価値に対して疑問を持つ気持ちが、自己理解の高い者よりも理解できるのではないか。しかし、ペツェッティーノの気持ちは、ストーリーの最初と最後で大きく変化する。その変化は、自己理解度の低い者にとって、「自分は自分である」ということを実感できる良い変化であったと考えられるのではないか。

表4 自己理解と主人公・ペツェッティーノの気持ちの理解(質問.1)における関連についてn=35



5. 学生の自己理解と一番印象的であった場面（質問. 2）との関連について

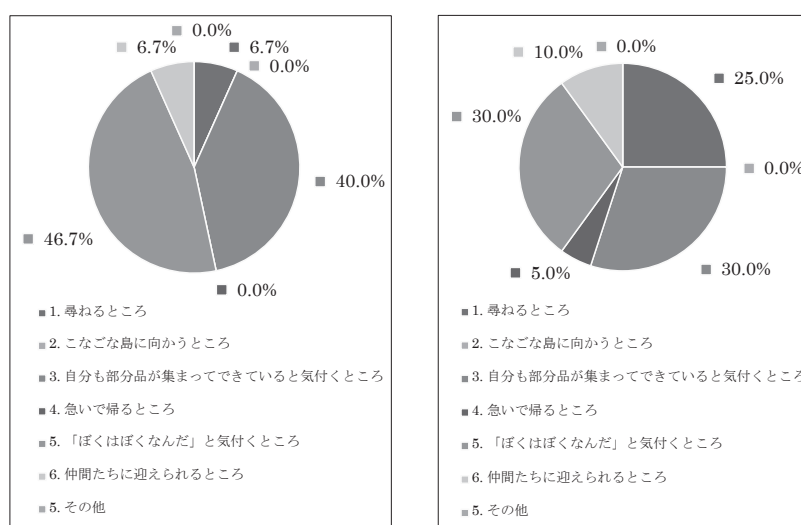
次に、自己理解と印象的な場面との関連について見ていきたい。（表5）

自己理解の低群では「5. 最後に「ぼくはぼくなんだ！」と気づくところ」の割合が一番高く、46.7%と約半数を占めた。それに対して、高群は30.0%であり、16.7%の差があった。この場面は絵本の最後のページであり、「ぼくはぼくなんだ！」という言葉は、ペツェッティーノが最後に発する言葉である。ペツェッティーノが自分探しの旅で知りたかった「自分とは何なのか」ということを表現している、ストーリー上で最も強いメッセージ性が含まれている言葉であると思われる。

また、低群で項目5の次に多かった「3. こなごな島でこなごなになって、自分も部分品があつまってできていると気がつくところ」と回答した者は、40.0%であるのに対し、高群では30.0%であった。この場面は「ぼくは ぼくなんだ！」という気づきを得るきっかけとなる場面であり、ペツェッティーノが自分を見つけた瞬間が「こなごなになる」という形で描かれている。

項目3と5のどちらも、ペツェッティーノの自己理解に変化が表れる場面である。結果、自己理解の高群より低群の方が、ペツェッティーノの自己理解の変化に注目していることがわかった。自己理解の低群は、ストーリーのはじめに自分の存在について疑問を持つペツェッティーノの気持ちと自分の自己理解の状況が近いと考えられるため、ペツェッティーノの自己理解が変化する過程に興味を持ったのではないか。

表5 自己理解と一番印象的であった場面（質問. 2）との関連について n=35
低群（n=15） 高群（n=20）

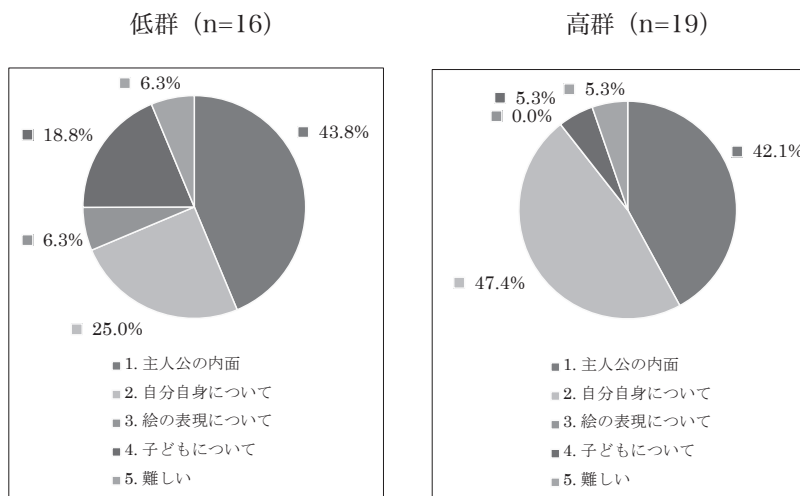


6. 学生の自己理解と感想文（質問. 4）の関連について

感想文は複数回答者が多く、延べ人数で示すこととした。（表6）の結果から、自己理解の低群・高群それぞれの項目別の割合の順位に注目した。自己理解の低群では、「1. 主人公・ペツェッティーノの内面についての記述」が43.8%で一番高く、2番目に高い項目である「2. 自分自身の生き方や自己の捉え方について」の25.0%と、18.8%の差がある。それに対して、自己理解の高群では、項目2が一番高い割合を占めて47.4%、次に項目1の42.1%と続いた。

つまり、自己理解の低群と高群では項目1と2の順位が異なっていた。低群は、主人公の内面について述べている者の割合が多く、自分自身について述べている者が少なかった。また、低群は子どもについての記述をしている者の割合が18.8%と高い。これは、低群の学生がペツェッティーノの気持ちは理解できても、自分を軸にせず、ペツェッティーノや子どもという自分以外の視点でストーリーを捉えていることが窺える。一方、高群では、約半数の者が自分自身について述べている。これは、高群が低群よりも自分について理解しているため、ペツェッティーノの気持ちを自分に結び付けて考えやすかったことを示しているのではないか。学生個人の自己理解の度合いが、絵本・『ペツェッティーノ』を解釈する上で、大きく影響していることがわかる。

表6 自己理解と感想文（質問. 4）の関連について n=35



7. 大人が絵本を読む意味について

対象者に、質問. 3 「大人が絵本を読む意味はあるか」と尋ねた結果、106名中103名が「ある」と回答した。残りの3名は無回答であった。

大人が絵本を読む意味について「ある」と回答した者がほとんどであったが、その理由を

自由記述で回答を求めた。その結果、以下のような回答が多く見られた。

「癒される」「子供の頃とは違った感覚で楽しめる」「新しい発見がある」「初心に返ることができる」

これらの回答から、絵本が大人に与える影響は個人によって違うと考えられるが、絵本に多様な価値を見出していることがわかった。

他にも「子どもに絵本の良さを伝えやすいから」「大人の感情が豊かになることで子どもに良い影響がある」など、子どもを視点に入れた回答も多くみられた。

脇本は、「優れた絵本を選んで子どもに手渡すことこそが、子どもを育てる大人の役目だ」²³⁾と述べている。学生が子どもを意識し、絵本と積極的に関わろうとする姿勢は、将来教育に携わる者として大切なことである。

また、本研究では、絵本・『ペツェッティーノ』を読み聞かせた直後、アンケート調査を行った。そのため、絵本・『ペツェッティーノ』に共感し、なんらかの良い影響を受けた学生が、「大人が絵本を読むことには意味があるのではないか」と思い、このような結果がもたらされたとも考えられる。

V. 結論

本研究では、絵本・『ペツェッティーノ』を取り上げ、青年期の学生が絵本をどのように読み、また、絵本を読むことにどのような意味を感じるのか明らかにすることを目的とした。

結果、ほとんどの学生が、ストーリー全体を通して変化していくペツェッティーノの「自己理解」に注目し、主人公・ペツェッティーノの気持ちを理解していた。また、自由記述の感想では、ペツェッティーノの気持ちの理解に留まらず、絵本のストーリーを自分の「自己理解」に関する経験や考えと結びつけた学生が多数であった。また、学生の自己理解と関連させた調査では、学生個人の自己理解の度合いが、絵本・『ペツェッティーノ』を読む上で大きく影響していることがわかった。そして、ほとんどの学生が、大人が絵本を読むことについて意味があると考えており、絵本に多様な価値を見出していることがわかった。

本研究での結果から、一冊の絵本での調査ではあるが、大人に近い青年期にあたる学生が絵本をどのように読み、絵本にどのような意味を感じているのかということを知ることができた。このことは、大人が絵本をどのように読むのかということの一つの手がかりになったのではないかと考える。大人が絵本を読む意味について、「新しい発見がある」「初心に返ることができる」等の学生の記述から、既に自己が確立された大人にとっても、絵本に学ぶことがあると言えるのではないか。

しかし、対象者である青年期の学生と『ペツェッティーノ』の組み合わせが、このような結果を起しやすかったとも考えられる。自分探しの時期である青年期と、自分探しの旅をするペツェッティーノという共通点があるため、学生は絵本のストーリーを読み取りやす

かったのかもしれない。また、調査対象である学生の特徴として、あらゆる絵本に接する機会が多く、大人が絵本を読むことに対して何の躊躇もなく考えることができ、絵本のストーリーへの理解も深かったのではないか。絵本や対象者を替えて同じような調査をすると、また違った結果であったのかもしれない。

さらに、大人と子どもにそれぞれ同じ絵本を読み聞かせ、年齢の違いから絵本の捉え方を調査することも、絵本の価値を考える上で非常に興味深い。

VI. 謝辞

ご多忙の中、本研究に携わってくださったK短期大学の学生の皆様へ心より感謝申し上げます。

VII. 脚注・参考文献

- 1) 吉田照子：「物語絵本の心」福岡女子短大紀要，第65巻，p17-32，2005
- 2) 朝日新聞社，企画事業本部，大阪企画事業部，松本育子：「レオ・レオニ絵本のしごと BOOK！ART！BOOK!」朝日新聞社，p7，2012
- 3) レオ・レオニ，谷川俊太郎（訳）：「ペツェッティーノ」好学社，p1-30，1978
- 4) ピーター・ホリンデイル，猪熊葉子：「子どもと大人が出会う場所一本のなかの『子ども性』を探る」柏書房株式会社，p259，2002
- 5) 上掲書4），p43，2012
- 6) 鳥越信：「絵本の歴史をつくった20人」創元社，p201，1993
- 7) 朝日新聞，2011. 3
- 8) 本田幸：「絵本『ペツェッティーノ』と読者間における自己認識についての考察：青年期学生を対象として」横浜女子短期大学，読書科学，第53巻（第1・2号），p13-23，2010
- 9) 上掲書8），p13-23，2010
- 10) 上掲書2），p56，2012
- 11) 太田洋介・石野陽子：「大学生における自分探し—自己理解の高低および学年差からの検討—」島根大学教育学部紀要，教育科学，人文，社会科学，自然科学，第45巻，p63-69，2011
- 12) 青木万理：「自己理解に関する文献研究」埼玉純真短期大学研究論文集，第2巻，p1-15，2009
- 13) 上掲書11），p63-69，2011
- 14) 上掲書8），p13-23，2010
- 15) 杉浦京子：「臨床心理学講義」朱鷺書房，p86，2002

- 16) 「日本国語大辞典WEB版 JK select series 日国オンライン」, 2007
- 17) 上掲書 8), p13-23, 2010
- 18) 上掲書 8), p13-23, 2010
- 19) 上掲書 11), p63-69, 2011
- 20) 上掲書 8), p13-23, 2010
- 21) 上掲書 8), p13-23, 2010
- 22) 上掲書 11), p63-69, 2011
- 23) 脇本聡美: 「子どもの成長と絵本: 子どもの翼がはばたくために」 神戸常盤大学紀要, 第4巻, p11-19, 2011

A Study on Ways of Understanding Picture Books and Expression —On the Picture Book “Pezzettino” by Leo Lionni—

Tsuyoshi TOMINAGA^{*1}. Aya TSUTSUMI^{*2}

^{*1}Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior University

^{*2}Advanced Course of Childhood Care and Education at Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

This study tries to understand both the picture book “Pezzettino” and the adolescent students from the common point of view of “self-understanding,” and focuses on how the students’ self-understanding is affected by reading the picture book “Pezzettino”.

As a result, we found that 88.4% of the students indicated an understanding of how the main character Pezzettino feels. In regard to memorable scenes, many students were attentive to scenes in which changes in Pezzettino’s self-understanding could be seen, and this suggested that students were more specifically reading Pezzettino’s feelings.

In a survey related to the students’ self-understanding, we compared the group with low self-understanding to the group with high self-understanding in regard to whether or not they understood the feelings of the main character Pezzettino, and 86.7 % of the low group answered with either “1. I understand very well” or “2. I understand somewhat,” whereas 75% of the high group answered similarly. Of that, 20.0% of the low group answered “1. I understand very well,” whereas only 5% of the high group answered similarly. Additionally, in regard to memorable scenes, we learned that the group with low self-understanding was more attentive than the high group to scenes showing changes in Pezzettino’s self-understanding.

While the survey was only over a single picture book, from the results of this study, we learned how adolescent students read picture books and what significance that see in them. We feel that this will be a key in understanding how adults read picture books.

Keywords : Picture Books, Pezzettino, Leo Lionni, Expression, self-understanding